

風竜王ケーテの趣味は遺跡調査である。
暇があれば、竜の姿で高速飛行し、各地の竜族の遺跡
を点検して回っているのだ。

「今日も平和であるな。よいことである」
ご機嫌に王都に戻ってきたケーテは、門の外におかし
なものを見つけた。

「おや？ あれはなんであろうか？」

何やら人族同士が争っているようだ。旋回して様子を
窺う。

「人族同士の争いに竜が介入すべきではないのかも知れ
ぬが……むむう」

悩みながら様子を窺っていると、片方がどうやら人族

ではないことに気がついた。

「あれはゴブリン！　ということはゴブリンに人族が襲おそわれているのだな」

それならば助けた方がいいだろう。ラックも褒ほめてくれるに違いない。

ケーテは近くに降下すると、人の姿に変化して、服を着る。

そして、ゴブリンたちの元に向かっていく。

「ゴブリンども！　ここはお主ぬしらの居場所ではないのである！　」

「GーGー？」

優勢だった十匹のゴブリンが、ケーテに襲いかかって

くる。

風竜王ケーテがゴブリン如ごときに後おくれを取るはずがない。あつさりとは全滅させた。

「これでよしと、お主たち、大丈夫であるか？」

ケーテが助けたはずの人族の方を振り返ると、そちらもゴブリンだった。

「G—G—G A！」

「……なんと。人がゴブリンになった」

ケーテは混こんらん乱した。助けたはずの人族が、ゴブリンに変化し襲いかかってきたのだ。

「これは、もしや眷けんぞく属とか魅みりよう了とか、そういうやつかもしれないのである」

もしかしたら人族に戻せるかもしれない。そう考えてケーテの攻撃は鈍る。

それでも、ゴブリン如きがケーテにかすり傷を一つつけることはできないのだが。

「ケーテ、何してるんだ？ ガルヴ、倒していいぞ」

「ガウ！」

そこにやってきたのは、ラックとガルヴだ。ガルヴの散歩で王都の外に出てきたのだろう。

あつという間にガルヴがゴブリンを倒していく。

「ラック、人族がゴブリンに変わったのだ！」

事情を説明すると「そんなわけあるか」といいながら、ラックは丁寧にゴブリンの死骸を調べる。

「やっぱりただのゴブリンだ。ケーテ、人族とゴブリンを間違えたんだろ」

「そ、そんな。最近は自信があつたのに」

「上空から見たからだろうさ。細かい造形が見分けられなかったんだろ」

「そうか、そうであるな！」

ラックがフォローすると、ケーテは機嫌がよくなつて尻尾を振った。